經濟論叢

第八十四巻　第六號

故名誉教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿
統計学＝社会科学的認識手段論の問題点……大橋隆憲　1
資本主義の運動法則における論理的なものと歴史的なもの(二)…吉村達次　17
急速税務減価償却をめぐる所得税会計の保守主義……高寺貞男　37
ヘンリ・ジョージについての一考察…北沢康男　55
ソースタイン・ヴエブレンに関する一研究……中山大　68
神戸正雄先生による再保険特約方式の輸入……佐波宣平　85
記事
神戸先生御逝去……91
追憶文……96
新村出　井藤半弥　本庄栄治郎　小島昌太郎
石川興二　蜷川虎三　大谷政敬　小山田小七
堀江保蔵　島恭彦　松井清

昭和三十四年十二月

京都大學經濟學會

統計学＝社会科学的認識手段論の問題点

――ブルガリアの学者の所説をみて――

大橋隆憲

まえがき

われわれは、「統計学は統計方法を研究対象とする学問である」と規定する立場をとっている。この規定は、外見的にはきわめて無内容にみえるが、そうではなく、統計学論争史を背景として見たばあい、きわめて豊かな内容をもつに至っている。

統計学方法論説は、ソヴェト統計学界の主流的な立場からは、ブルジョア統計思想に由来するもので、実践的には有害である（1, 2. 数字は稿末文献番号を示す）、と批判された。その批判の内容には、対象的側面を重視する点において、われわれの共感する多くの主張を含むが、「方法」概念の理解の仕方に、つまり、方法概念にその成立条件と適用形態を含ましめるか否かの点で、われわれとソヴェト学者では意見を異にする。この点について、既にのべたこともあるが[3]、本稿でもう一度、ソヴェト学界の主流的見解に同調せんとするブルガリアの V. St. Tzonev, R. Janakieff の所説を吟味しつつ、われわれの立場を反省しておきたい。

まづはじめに、統計学・学問論の問題点を整理しておくのが便利であろう。すでにのべたごとく、われわれの立場は、統計学を方法論、とくに、社会科学方法論、さらに正確には、社会科学的認識手段論と規定する立場である。もちろんかかる立場が維持しうるや否やは、われわれの全研究において、その終結点において、明かとなるのであろうが、何故に特定の問題を選び、何故に特定の見通しを立てるかは、「立場」によるというほかはなく、また、立場は、論理的には出発点において規定されねばならぬものであろう。われわれはこの意味で、出発点においてひとまづ、統計学の一般的性質を社会科学方法論（正確には社会科学的認識手段論、以下同じ）と規定する。このように規定する立場を、われわれは、われわれの到達した成果に基づいて正しいと思うが、しかしそれは主観的な心証であって、まだ、客観的な証明が与えられているわけではない。したがって、ソヴェト統計学界の主流的見解のごとく、実質科学説の立場をとって出発することも、同じ資格で認めざるをえない。しかし、出発点において、いづれかを選ばねばならぬとせば、いかにして、いづれの立場を選ぶか、問題であろう。ここに論者の見解のわかれる第一の分岐点がある。

次に、統計学を方法論と規定する立場をとるにしても、統計方法の本質を規定するものは何か、という点に問題がある。従来の見解では、統計方法は「集団」の数量的研究方法である、とする点においてほぼ一致をみるに至っている。つまり、統計方法は、「個体」の研究方法ではなく、「集団」の研究方法である、とするのである。しかし、この集団説をとるためには、「個体」と「集団」を区別する前提的な考え方それ自体の問題を解決する必要がある。加うるに、統計方法は、何故に、また、いかなる意味で、個体の研究方法たりえないかを明かにせねばならぬであろう。そうでなければ、統計方法を「集団」の研究方法に限定する意味が稀薄である。しかし、必ずしも集

団説が成立しうる唯一のものではない。ここに見解のわかれる第二の分岐点がある。

さらに、「集団」が統計方法の成立基盤であり、適用対象であるとしても、集団を単に個体に対する概念として定立するにとどまるかぎり、統計学の形式的・数理的側面での問題を捉えうるにすぎない。いわゆる統計的研究において現に問題とされている集団には、その性質と問題を異にする二種のものがある。すなわち、その存在が客観的に規定されている集団と意識的に構成された集団とがそれである。前者を「客観的集団」、後者を「解析的集団」と名づけるならば、数理統計学者は一般に、統計方法の本質を規定するものは、「解析的集団」であるとするに対し、われわれは「客観的集団」であるとする。統計方法にとって、いかなる意味においてその何れを基木とするか、また、すべきか。ここに見解のわかれる第三の分岐点がある。

次に、客観的集団も、その存在を規定する諸関係が自然的か社会的かによって「自然的集団」と「社会的集団」とに区別しうる。もちろん、実際に存在する集団は、必ずしも純粋に一方的にのみ規定されているとはかぎらない。しかし、一定の立場からして、いづれが基本的、本質的規定をなすかを、われわれは区別しうるし、また、区別せねばならぬ。けだし両者は性質と問題を異にするからである。

右のごとく考えるわれわれは、社会経済統計方法の本質的規定は「社会的集団」によって与えられるとするが、英米派の一般統計方法論者は、あえて両者の区別の必要を認めない。いな、むしろ実質的には「自然的集団」を本質的なものとみなしている(4, P. 2)。いかなる意味において、いづれの集団を本質的とみなすか、ここに見解のわかれる第四の分岐点がある。

社会科学的統計学にかんするかぎり一般に、「社会的集団」を基本概念とし、ここから統計方法の理論的問題を

展開せねばならぬし、また、しうる、とわれわれは考える。ところで問題をさらに経済統計学に限定、具体化するばあい、現実に与えられる具体的な経済統計そのものの理解・吟味・批判・利用を、経済学の課題とするか、それとも、統計学の課題とするか、見解のわかれるところで、ここに第五の分岐点がある。

ソヴェト統計学界の主流的な見解によれば、経済統計学の主要な実践的課題は、現実的所与としての経済統計そのものの、理解・吟味・批判・利用である、とする。このかぎり、われわれもソヴェト学者と見解を異にしない。問題は「方法」概念の理解の仕方にある。「方法」概念は、われわれの見解によれば、単に既成の方法の数論理にとどまるものではなく、方法の成立と適用の諸規定を含むものであると理解する。ところがソヴェト学界の主流派は、方法論説なるものは、方法または手続の数理技術的解説にとどまるものと想定し、そのような方法論説に反対している。そして、経済統計学の主要な実践的課題への解答は、そのやうな方法論説の立場では不可能で、実質科学説の立場においてはじめて可能である、と主張する。

われわれは、そうではなく、方法論説は、方法の数論理や技術的手続にとどまるものではなく、方法の成立条件、適用形態をも問題とするものと理解する。したがって、現実の具体的な統計そのものの、理解・吟味・批判・利用は、当然に、統計学＝方法論説の立場で問題とさるべきものとする。つまりわれわれは、経済統計学の現段階の主要な実践的課題遂行の能否は、実質科学説をとるか、方法論説をとるか、という立場の形式的な相異によるというよりは、「方法」概念の内容的な理解の仕方によるものであると考える。ここで問題は、ふたたび第一の分岐点に立ちかえった。

以下、上記の問題点にしたがって、Tzonev と Janakieff の所説を吟味しつつ、われわれの立場を反省する。

一　方法論の立場に対して

統計学の歴史をかえりみれば明かなごとく、十九世紀後半から二十世紀初頭の資本主義社会においては、大体において、統計学を方法論と規定する立場は英米学派により、実質科学と規定する立場はドイツ学派によって支持されていた。ところが世界体制が二つにわかれた現在、方法論説は資本主義社会の学者により、実質科学説は社会主義社会の学者によって支持される大勢となった。そして、資本主義社会にあっては、統計的研究の重心は、社会科学の分野にではなく、自然科学と技術学の分野に移され、統計方法は、社会科学の方法としてよりは、むしろ自然科学の方法として重視されるに至った。

右のごとき世界的状況下にあって、統計方法を社会科学の方法として捉える社会科学方法論説は、わづかにポーランドと日本において、マルクス主義者の一般的支持をうけているに過ぎない。社会主義的諸国の大勢は実質科学説が有力であって、ここに問題とする Tzonev と Janakieff も、方法論説に反対する。エフ・エゲルマイエルは「社会主義諸国および資本主義諸国における現代の統計学観について」[5]で、ブルガリアの学者では、さらに A. Toreв を問題としている（5, стр. 46-47.）が、本稿での考察は、資料の関係から、主として右の二人にとどめる。

（A）Tzonev の見解

まづ Tzonev の方法論説に対する見解からみる。Tzonev はまづ、統計学の学問的性質が改めて問題とされる理由を次のごとく捉える。「経済統計理論の対象についての論議が生じた理由は、問題たる経済現象の性質とよく結

びついていない統計＝経済学的公式を平気で用いるところの、この学問における形式主義的研究スタイルの認識論的な根をあばき出す必要からであった」(6, S. 67. f.) と。彼にとっては、形式主義の克服という課題が方法論説の採否を決する思考基地である。彼によれば、「経済統計理論の課題が方法を仕上げることにあるとする見解は、この領域における形式主義の認識論的な根を克服することをさまたげる」(6. S.67. f.) とする。したがって問題は、彼の思考基地を承認すれば、(一)方法論説なるものは、いかにして、また、何故に、形式主義を克服しえないか、(二)いかなる説によれば形式主義を克服しうるか、を明かにすることであろう。

Tzonev は、彼の論文「統計理論の対象について」[6]においては、(一)の問題を正面から扱っていないので、われわれは先づ(二)の問題をみて、次に(一)に論及する。

彼によれば、「経済統計理論の客観的、現実的研究対象にせまるには、指標概念 Kennzifferbegriffe の本質と意義から出発せねばならぬ。なぜならば、この概念に反映される経済的現実の特質こそ経済統計理論の対象だからである」(6. S. 68. f.) とする。つまり彼は、言葉はちがうが、「統計の学としての統計学」[7]を主張しているのである。

この主張を基礎づけるために、彼は、「経済学的概念」「統計指標概念」「統計方法」の関係を、経済学における「労働生産性とその上昇」と「労働生産性指数」の関係を例として解説する。それによれば、「指数概念」が「指標概念」に、「指数公式」が「統計方法」に対応するごとくである。彼によれば「指数公式は指数概念を表現するための一つの手続であって、ただ一種類ではない。指数概念は、指数公式を構成する記号の助けなしで表現できる。問題は、したがって、直接的に指数公式の基礎になっている統計的労働生産性概念が、経済学における労働生産性の変化という概念に対してどのように構成されるか、を正確に規定することにある」(6, S. 68. f.) とする。そして、

「経済学上の労働生産性の変化という根本概念は、対応する集団的(平均的)現象を不完全にしか反映していない。この経済学的概念の不完全さこそが、経済統計理論を成立せしめるのであって、その課題とするところは、対応する指数概念――指数公式――を導き出して、実践の要求を充足することにある」(6, S. 68. f.)とする。

Tzoneyは、経済統計理論は暫時的性質をもつものと考える。彼は「経済統計理論は、一般経済学的概念の成熟の過程を助け、これによって統計実践に役立つが、この役割は歴史的に条件づけられている。その限界は経済学的知識の到達した発展段階によって規定される。その当時の経済学的概念の形態が未熟であればあるほど、経済過程の具体的・統計的研究に当って、経済学的概念をどう適用するかという観点から、統計実践のために、経済統計理論の研究作業が、ますます必要である」(6, S. 68-9.)とし、経済学の法則と概念が次第に統計化するにつれて、経済統計理論はそれだけ不用化する、と考える。そして「経済諸科学の歴史的発展の観点から、経済統計理論は、経済諸科学の対象と同じ現象・過程を研究するものにほかならない、となしうる。理論統計的研究作業に当って、この事実を銘記するなら、原理的に、形式主義的傾向の生ずる可能性はありえない」(6, . 69S. f.)と主張する。

Tzoneyはつづいて、「経済統計理論家は、経済学的分析に基づいてその概念を構成し、それを経済学的概念として仕上げねばならぬ」とするが、「経済統計理論は経済学的法則の研究とその定式化には関係しない」(6, s. 69. f.)とし、この点に経済学との区別をみている。

次に、方法論説なるものは、いかにして、また、何故に、形式主義を克服しえぬか、についてのTzoneyの見解をみる順序となったが、われわれの依拠資料(6.)では、右について明確に知りえない。ただ彼が、方法論説なるものをどのようなものとして考えているかは知りうる。以下、これを手がかりとして彼の考え方をみる。

彼によれば、方法論説なるものは、「経済統計理論の課題は方法を仕上げることにある、とする見解」(6, S. 67. r.)であるが、すでにみたごとく、彼は、「方法＝指数公式」の基礎に「指標概念＝指数概念」を、さらにその基礎に「経済学的概念」を、という階層的な考え方をする。そして方法論説には、階層の混同、または、見落しがある、と彼は次のごとく指摘する。

「多くの著者は、指数概念を次のごとき方法ないし技術的手続とみなす傾向がある。すなわち、それは、生起する集団過程の観点から現実をみるばあいに、その現実に対し、対応する経済学的概念を適用する助けとなる方法ないし技術的手続とみなすのである。これらの著者たちの意見によれば、労働生産性なる根本概念が、対応する集団過程把捉の一般的方向だけをわれわれに与え、その指数は、われわれが直接的にこの過程を捉える手続ないし方法だ、というのである」(6, S. 68. l.) と。

このような見解に対して彼は次のごとく云う。「われわれはしかし、時々の指数概念を、対応する経済学的概念についての方法として説明することは誤りである、と信ずる。それは、経済統計理論における形式主義的作業スタイルに反対する闘争の観点から、有害である。この領域における学問的協働に際し、経済統計理論は方法を仕上げることにある、とする信念を強めるからである。労働生産性の指数概念は、対応する経済学の概念と同じく一つの概念である」とし、両概念の差異をのべる (6, S. 68. l.)。

以上のごときがTzonevの経済統計理論についての見解の概略であるが、彼はなお、一般統計理論の対象を問題とする。彼によれば、従来の一般統計理論は、論理学か数学の内容に類するが、「一般統計理論の性質は、われわれの見解によれば、全く異った接近を要求している。一般統計理論の実質的、非方法論的部分は帰納科学 induktive

Wissenschaft である。したがってそれはその性質上、論理学や数学よりも理論統計の特殊諸部門に著しく近接している。一般統計理論は、統計の特殊部門と専門諸科学に属する経験的諸事実から成長する。統計領域の理論家が、一般統計理論を現実に結びつけるばあい、統計の特殊諸部門と対応する専門諸科学を無視するならば、彼は形式主義におち入る危険をおかすのである」（6, S. 69. 1-r.）と。

右は常識的に当然な考方であるが、「一般統計理論の現在の課題は、(一)統計の特殊諸部門とそれぞれの専門諸科学の、同種的なカテゴリー形態（平均的大いさの形態、分布の形態、相関指標、等）をもつ諸概念を分析すること、(二)この分析によりそれぞれのカテゴリー形態の実質的起源と意味を明かにすること」（6, S. 69. r.）とし、ストカステックな合法則性についても、一般統計理論はそれを数学公式として関心をもつのではなく、現実の各種領域で同じストカステックな形態をもつすべての法則に等しく含まれている帰納的意味を発見するように努めねばならぬ、としている。なお彼は、一般統計理論の将来に対する展望は、統計の特殊諸部門とは異って、基礎的な経済諸科学の成熟によっておびやかされない、とする。すなわち次のごとくである。

「理論経済諸科学の発展法則として、経済学の概念と法則が次第に《統計化》すればするほど、一般統計理論と理論統計の特殊諸部門との間にある連関は消滅し、一般統計理論とそれぞれの理論的専門諸科学との直接的な結びつきが作り出される。現実に対する一般統計理論の結びつきは弱まるのではなく、ただ、結びつく行程が、理論的専門諸科学によって、より多く行なわれるのである」（6, S. 69-70）と。

以上が Tzoneν の一般統計理論についての見解であるが、ここでも形式主義の克服のために、方法的側面ではなく、対象的側面の重視の必要が強調されている。

ところでTzonevはなお二三の論文[8]を書いているが、まだ入手しえぬので、その内容を、批評者たちのいう所から知るとしよう。

Ernst Strnadによれば、Tzonevは一九五一年の「統計方法の論理的基礎について」[8]という論文ではまだ、《理論統計学を統計方法の科学》として語っているが、今日、彼は《一般統計理論》を《帰納科学》として説明している(9, S. 1216.)という。Strnadは、この意見の変更を、むしろ後退だとする。なぜならば、弁証法的唯物論は、このような絶対的意味の「帰納科学」を排斥しているからだ、という。

なお、エゲルマイエルによれば、「V. Tzonevの意見によれば、統計方法は独立した認識方法ではない。統計方法論の問題は論理学の問題であり、統計理論はこの問題をあつかわない」(5, ctp. 46.)としているという。

以上がTzonevの見解の要点であるが、経済統計理論の暫時的性格を除いて、Rumen Janakieffの見解もほぼ同様とみなしえよう。

(B) Janakieffの見解

Janakieffもまた一九四八年以来の統計学論争の目的は、社会主義統計学から形式主義を排除することにあったとし、統計学における形式主義を次のごとく規定している。「経済統計学における形式主義は、統計的・経済的指標を形式数理的概念であるかのように考え、これらの指標概念にたいし、充分に科学的、実質的、経済学的な基礎づけを与えない。したがって、指標を発展させ組みたてるばあいの重点は、形式数理的側面におかれ、また、けっきょくは所与の諸概念のあいだの関係におかれ、対応する諸現象の実質的本質との充分な結びつきにおかれていな

い」(10, S. 645.) と。かくのごとく Janakieff にとっても、形式主義の克服という課題が、方法論説の採否を決する思考基地とみなしうる。

Janakieff によれば、「形式主義が理論統計諸科学にもち込まれるのは、統計諸科学は統計資料加工の方法または手続を明かにするにすぎない、という見解によってである。実際にこの科学の理論的内容をなしているところの、経済統計理論の概念と指標を、ひとは誤って方法と考える。実際には、理論統計諸科学は経済的現実を研究対象としている」(10, S. 646.) という。

右のごとく Janakieff は、形式主義は方法論説によって理論統計諸科学にもち込まれる、と主張する。しからばいうところの方法論説とは内容的にいかなるものか。単に公式的に、概念や指標を誤って方法と考えているというだけでなく、もっと立ち入って、何故に概念や指標を方法と考えていけないのか、また、それがいかにして形式主義の導入を必然ならしめるのか、を明かにせねばならぬ。右のごとき意図の下に、㈠ Janakieff の統計指標概念とはいかなるものか、㈡ Janakieff は統計指標概念をいかに問題とすべきとなしているか、㈢そうした問題の仕方で果して方法論説を克服しえたか、㈣ Janakieff は統計方法それ自体をどのように考えているか、の順でみてゆくことにする。

Janakieff は、統計指標概念は帰納的概念（科学的帰納によって誘導された概念）であって方法でないと強調する。ところがまた、「これらの誘導された理論的帰納的概念は、それ自身は方法でないが、認識過程において、一定の時間的・場所的限界におけるそれぞれの経済現象過程の具体的な反映と把握のための手段 Mittel として役立つ（統計的、具体的演繹）ということを、次のもう一つの論文で明かにしよう」(10, S. 653) と云っている。

そこでわれわれも、Janakieff のもう一つの論文によって[11]、それ自身は方法でないが、認識過程において手段として役立つ統計指標と呼ばれる帰納的概念についてみることにする。

Janakieff もまた、経済統計理論の課題を、統計方法を仕上げることではなく、統計指標概念を仕上げること、とみる（11, S. 877.）が、一般統計理論でとりあげらるべき指標として、㈠集団現象過程の総体的水準を反映する諸指標（平均の諸形態）、㈡分散の大いさを反映する諸指標（偏差の諸形態）、㈢社会経済現象過程の歴史的発展を特色づける諸指標（指数の諸形態）、㈣所与のモメントに対する現象過程の一定の関係および構造を反映する諸指標（比率の諸形態）、㈤現象過程間の因果関係を特色づける諸指標（相関係数、等）を、あげている（11, S. 873）。経済統計論や部門統計論では諸指標はもっと具体的であるが、一般統計理論はこれらの部門統計の全経験を一般化し、より抽象的な形態で考察し発展さすべきだ、とする。

右のごとき一般統計指標概念の研究に当って、ブルジョア的著作者は、数学者と統計学者の課題を混同し、統計理論を「数学の一部門」と称するが、その誤りを Janakieff は以下のごとく指摘する。「数学は諸指標の一般数理的性質を抽象物の一体系として考察するが、それらの適用限界を問題にしない。……数学における概念は結局は帰納に由来するものであるけれども、（統計理論を含む）数学は、他の実質的理論諸科学のごとく、存在する現象過程の正しい反映として、その用いる概念の実質的な本質と認識の帰納的な基礎づけを問題とするものではない。……数学は、統計学にとって最も重要な問題であるところの、客観的現象過程の所与の総体の一定の諸特性を正しく反映し特色づけるところの一指標が、何故に一定の場合に適用されねばならぬか、という問題になんの答も与えない。理論統計学の最も重要な課題は、指標概念の時々の定義を基礎づけ、指標の一般的認識内容を明かにすることであ

る。それは、科学的帰納の方法（Weg＝Methode）によって、統計上の概念、カテゴリー、指標の認識的意味を明かにせねばならぬ」(11, S. 875-6.) と。

右によって明かなごとく、Janakieff も Tzonev と同じく、理論統計学の課題を、それぞれの統計指標概念とその体系が、現実をより正しく反映するようにそれらを帰納的に仕上げること、と捉えている。このかぎり、われわれの見解とことならない。対象たる現実を正しく反映するため、諸概念とその体系を帰納的に問題とする科学を、すべて「実質科学」と規定するならば、理論統計学も当然に実質科学に含まれるであろう。しかし、理論統計学は、経済学と異って、現実の対象それ自体を直接的に問題にしているのではなく、対象の認識手段たる「概念」を直接的に問題にしているのである。Janakieff も云うごとく、「一般理論統計学の一般統計的な指標概念とカテゴリーは、それぞれの部門統計学の具体的指標と不可分に結びついている形式」(11, S. 877.) であるが、こうした認識手段たる概念の仕上げを課題とする学問を「方法論」と規定するならば、理論統計学は当然に方法論に含まれる。

現に Tzonev, Janakieff の批評者 Strnad も、法則研究と事実研究を区別し「理論」たる概念は法則の「理論的」研究にほかならず、「合法則性の研究に従事せぬ科学は独立科学ではなく、単に方法でしかありえない」(9, S. 12-6.) としている。そして彼は云う、「経済学の領域における事実研究の一部分が特別の名称、つまり経済統計学の名称で行なわれるとしても、それはあくまで事実研究であって、それ以上のものではない。経済法則の研究には、ただ一つの理論がありうるのみであって、それは政治経済学の理論である。経済学の領域におけるその他の諸研究はもはや理論ではない。オストロヴィチャノフが統計標識（指標）作成を統計方法に数える場合、われわれがそれに賛成するのはその意味である。自然諸科学においても、一方では理論への、他方では現実への、最大限の適合を

計らんとする手続と概念的配慮を、事実研究の方法論としている」(9, S. 1217-3) と。そして Strnad は「Janakieff は彼の論文で、《経済統計理論》の《内容》を、Tzonev と同じく、《概念と指標》に還元する。《統計学の対象》には《具体的反映のための手段》しか残らない。これはつまり、統計資料に示される客観的現実自体の反映ではなく、この反映の手段にすぎない。……この立場は、単なる方法の立場にきわめて近似している」(9, S. 1218.) とする。そして Strnad も、Tzonev と Janakieff は、言葉の上では方法論説に反対しているが、実質的には、彼等自身、方法論説を主張している、とみる。

Strnad の見解によれば、統計学は、統計方法という特殊な方法をもっているにしても、純然たる方法論的科学ではなく、実質的な研究対象をもっているとし、その研究対象は経済学の対象と同一である、とする。すなわち「等しい現象に対して、経済理論家が使用する概念と事実研究家が使用する概念との間には、原則的な区別や対立は全く存在せぬ筈である。それは同一の概念であって、前者はより抽象的に、後者はより具体的に捉えられた概念である。純実用目的からつくられた指標プログラムと、科学目的からつくられた指標プログラムとでは、外見的には全く異ることが稀ではない。しかし、理論と経験が一致せねばならぬように、対応する概念もまた相互に本質上等しくなければならぬ」(9, S. 1217.) としている。これは Tzonev＝Janakieff の「指標概念」の規定とは異る。

Strnad は「概念なるものは物質的なものでなく観念的なものであることは云うまでもないが、概念は統計学の研究対象をなすものではなく、事実――そしてこれこそが物質的なものである――が統計学の対象である、そして、事実の研究に必要な概念は事実から切り離すべきではない」(9, S. 1219) として、Tzonev＝Janakieff の見解は表面的には実質科学説の立場を擁護するかのごとく見えるが、内容的には方法論説に近似している、とする。

Strnad のいうごとくであるとすれば、Tzonev=Janakieff はその主観的意図に反し、方法論説を克服しえていない、ということになる。われわれは、Strnadの、概念は統計学の対象でないとする見解に組しえないが、Strnad と共に、Tzonev-Janakieff が方法論説の立場を否定して実質科学説の立場に移行しえた、とは認めえない。

Janakieff は統計理論は統計指標概念の理論として発展させられねばならぬことを主張し(11, S. 870.)、統計指標概念は、概念であって方法ではないとくりかえし強調している。その彼が、「統計方法」をどのようなものと考えているか、ここで簡単にみておく。彼は「科学的研究におけるいわゆる一般統計方法なるものは、統計的形態における帰納と演繹にほかならない」(11. S. 868., S. 877.) とする。そしてそれを例示し「たとえば実際において算術平均の大いさを具体的に計算することは、統計的性質の演繹的包摂である。これに対して、《算術平均》という一般概念を誘導することは、帰納的一般化と解されねばならぬ」(11, S. 868) としている。つまり、統計指標概念の構成を帰納、その適用を演繹、とするのであるが、Janakieff によれば「方法論的命題は一般理論統計学にとっては第二次的意義をもつ」(11, S. 870) にすぎない。彼はそれを論理学の課題とする、つぎのごとくである。

「指標の具体的大きさが実際に計算されるばあい、ひとは指標概念を、一般統計方法の演繹的適用の手段として使用しているのである。この指標はそれ自体としては方法ではない、方法とは(全認識過程の)道程 Weg であって、ひとはその道程で指標概念を作成し使用するのである。一般統計方法は、客観的に存在する現象過程の研究にあたり、切り離されて適用されるのではなく、認識過程のあらゆる側面、あらゆる契機を考慮することを意味する。このゆえに論理学は、個別的(単純)形態の認識過程を研究すると同様に、統計的形態における認識過程の進行の本質と弁証法を研究せねばならぬ。」(11. S. 870.) と。

右によりJanakieffの「統計方法」についての見解の概略を示したが、問題は、「統計方法」の特殊性を規定するstatistische od. entfaltete Form と einfache od. monotypische Form の関係にある。（未完）

(1) ヴストロヴィチャノフ、統計学にかんする論争の結果によせて、ソ同盟「科学アカデミヤ通報」、一九五四年第八号（邦訳、経済統計研究会「統計学」第二号、一九五五年九月号所収）

(2) 有沢広巳編、統計学の対象と方法、一九五六年。

(3) 拙稿、統計学＝社会科学方法論説の構成、北海道大学「経済学研究」第十二号、一九五七年。

(4) R. A. Fisher, *Statistical Methods for Research Workers*. 1925.（邦訳、遠藤、鍋谷、一九五二年）

(5) Ф. Эгермайер, О современных взглядах на статистику в социалистических и капиталистических странах. Вестник статистики, 1958. No. 10. стр. 42–51

(6) V. St. Tzonev, Ueber den Gegenstand der Theorie der Statistik. *Statistische Prxis*, 1957. S. 67–70.

(7) 高橋英雄、統計の学としての統計学、統計局研究彙報、第二号、一九五二年四月。

(8) V. St. Tzonev, *Die Dialektik und die statistische methode*, 1949., *Ueber die logischen Grundlagen der statistischen methode*, 1951., *Der Gegenstand der Theorie der Statistik und die Ueberwindung des Formalismus*, 1957.*（＊印副用原稿）(*Statische Praxis*, 1957, S. 68 の註による)

(9) Ernst Strnad, Nochmals zum Gegenstand der Statistik, Eine Antwort auf die Konzeption Janakieffs. *Wirtschaftswissenschaft*, 1957. Heft. 8. S. 1215–1220.

(10) Rumen Janakieff, Bedeutung und Gegenstand der Theorie der Wirtschaftsstatistik, *Wirtschaftswissenschaft*, 1957. Heft. 5. S. 641–654.（邦訳、国際貿易、第四二号、一九五八年二月所収）

(11) Rumen Janakieff, Theoretische Statistik, statische Methode und Mathematik. *Wirtschaftswissenschaft*, 1957. Heft. 7 S. 866-878